



第 159 号

二〇二〇年三月二十七日発行
発行者 奈良県立
橿原考古学研究所
奈良県橿原市畷傍町一番地
編集者 鈴木裕明

故 菅谷文則先生を偲ぶ講演会

「菅谷文則先生と歩んだ日々」

昨年六月一八日にご逝去された当研究所第五代所長、菅谷文則先生を偲んで、ゆかりの深い研究者による講演会が、本年二月一〇日に当研究所講堂で開催されました。講演会は、

当研究所と公益財団法人由良大和古代文化研究協会が主催しました。当日の参加者は、荒井正吾知事、青柳正規所長、菅谷家ご親族をはじめ、当研究所所員、友史会会員、県行政関係者、ご友人など、総勢約二二〇名でした。

講演会に先立ち、まず参加者一同で菅谷先生を偲んで黙祷を捧げました。また、調査機材を当研究所にご寄付いただいたご子息の菅谷雅氏に、荒井知事より感謝状が贈呈されました。続いて菅谷先生の略歴が卜部行弘資料課長より紹介され、追悼の辞として、荒井知事より菅谷先生との

思い出と感謝のことが、泉森駿特別指導研究員より菅谷先生の研究業績が、それぞれ語られました。

追悼講演では、最初に前園實知雄特別指導研究員から「菅谷文則先生が結んだ人と考古学」と題して、中国北京大学留学時代の思い出や日中考古学界の交流・発展への貢献について語られました。次に森下恵介共同研究員から「菅谷文則先生と山の考古学」と題して、大峯奥駈道の調査研究と山の考古学研究会結成の経緯を菅谷先生の人となりとともに語られました。最後に本来であれば、中国社会科学院考古研究所の白雲翔研究員から「菅谷文則先生の中国考古学と鑑鏡研究」と題したご講演をいただくことになっていたのですが、

折からの新型コロナウイルス感染症流行の影響で来日が中止となり、あ

次 目

故菅谷文則先生を偲ぶ講演会
「菅谷文則先生と歩んだ日々」
法隆寺建築様式の考古学的検討
―後漢から南北朝の斗栱型式の考察―
中国陝西省における研修(上)
附属博物館関連展示案内・海外交流

編 集 部 1
内 藤 元 太 2
北 井 利 幸 6
編 集 部 8

らかじめお送りいただいた講演資料を川上洋一調査課長が代読しました。ご講演のそれぞれの先生方から、菅谷先生の人柄、研究姿勢・業績が偲ばれる印象的なお話をいただきました。参加者の皆様は熱心に聞き入り、各々がお持ちの菅谷先生との思

い出に浸っておられました。閉会の辞として、青柳所長より菅谷先生への追悼の言葉が述べられ、橿原考古学研究所の今後の発展への決意が示されました。菅谷文則先生のご冥福をお祈り致します。



写真1 泉森駿氏による追悼の辞



写真2 前園實知雄氏による追悼講演

法隆寺建築様式の考古学的検討

— 後漢から南北朝の斗拱型式の考察 —

内藤 元太

一、はじめに

雲斗・雲肘木をはじめとして、世界最古の現存木造建築である法隆寺金堂・五重塔・中門、法起寺三重塔に見られる建築様式には、後の時代には見られない特殊な意匠が数多く残されている（本稿ではこの建築様式を法隆寺建築様式と呼称する）。

料的制約が大きい。法隆寺建築様式の伝播元と考えられる朝鮮半島では、金工品や慶州雁鴨池などから出土した若干の建築部材、そして高句麗の壁画墓などはあるものの、七世紀以前の具体的な建築様式を考えるための資料は関口の検討以降あまり増加していない（李二〇一四）。

紙面の都合上詳細は述べないが、この建築様式のルーツを探るため、中国大陸の古墓や石窟に見られる建築様式と法隆寺建築様式を比較する試みが古くから行われてきた。なかでも考古学的な発掘の成果、美術品などを悉皆的に扱い、総合的な検討を行った関口欣也の研究の影響は大きい。関口は主に高句麗の壁画墓で見られる石刻斗拱や絵画の分析から、法隆寺建築様式の遡源を後漢の余韻を残した東晋のころの建築様式であると考えた（関口一九七六）。

しかし近年、斗拱における「舌」に着目し、東アジアの古代建築史の中で法隆寺建築様式を捉えようとす

る研究が出されているなど（唐二〇一七）、新たに報告された中国国内の資料を用いることで、法隆寺以前の建築様式あるいは同時代の建築様式を検討する余地が出てきている。本稿では資料紹介を中心に、特に斗

表1 舌がある石刻斗拱を有す崖墓

名称	年代
1 胡家湾墓群一号墓	後漢初期
2 柏林坡一号墓	元初四年(117年) 後漢中期
3 金鐘山Ⅰ区一号墓	後漢晩期
4 金鐘山Ⅱ区一号墓	後漢晩期
5 紫荆湾一号墓	後漢晩期
6 紫荆湾三号墓	後漢晩期
7 松林嘴墓群一号墓	後漢晩期
8 洞子排墓群一号墓	後漢晩期
9 中江塔梁子七号墓	後漢晩期
10 桐子湾五〇号崖墓	後漢晩期
11 吳家湾墓群一号墓	後漢末期

拱について注目し、研究を前進させたい。

二、後漢の崖墓に見られる石刻斗拱
四川省を中心とした地域には、前漢から後漢にかけて、「崖墓」という墓が造営された。この崖墓には、生活の風景等を題材とした多数の画像が彫刻されているが、そこには舌のある斗拱も描かれている。

「舌」とは法隆寺金堂の修理工事報告書の中で「舌状の作出」と表現された肘木下端に見られる特殊な細部意匠である。木質部材の例としては、山田寺、法隆寺金堂・五重塔、薬師寺東塔にのみ確認されている。中国・朝鮮半島での木質部材の現存例はないが、斗拱を模した石刻の中に舌が表現された例が見出されたため、舌は法隆寺建築様式の起源を探る上で、重要な研究対象となってきた（研究史については「唐二〇一七」を参照されたい）。

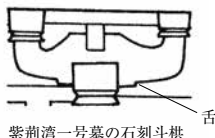
この舌の例は現在までに一四例存在することが指摘されている。筆者はさらに四川省にある鄧江崖墓群をはじめとした崖墓中にも、唐編年でいう「古形期」（唐二〇一七）にあたる舌が表現された石刻斗拱が一例あることを確認したのでそれを紹介したい（表1）。



胡家湾墓群一号墓の石刻斗拱



紫荆湾一号墓の石刻斗拱
(筆者撮影)



紫荆湾一号墓の石刻斗拱
(実測図S=1/40)

図1 崖墓における石刻斗拱

これらの斗拱の多くは双斗で、皿斗が表現されるものもあり、後漢の斗拱型式の様相をよく伝えている（図1）。

なかでも特に注目されるのが、柏林坡一号墓の例である。この墓には「元初四年」（西暦一一七年）の紀年銘があり、その前後に墓が造営されたことがわかる（四川省考古研究院ほか編二〇〇七）。

また、出土遺物の編年の位置づけから、柏林坡一号墓より前段階に造営されたと考えられ、出組の表現がなされた石刻斗拱がある胡家湾墓群一号墓にも舌が認められる（図1）。

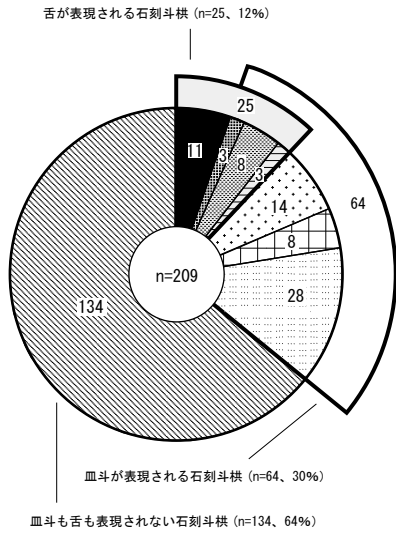
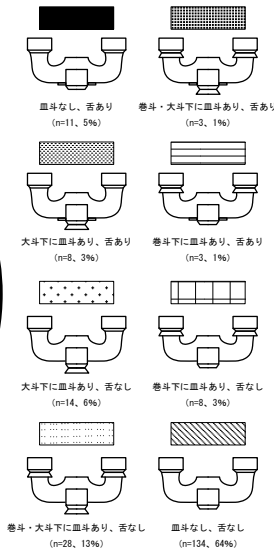


図2 郷江地域の崖墓の石刻斗拱における舌・皿斗の出現率



墓の編年の位置づけが正しければ、本例は現状最古の舌の表現と言えるであろう。なお古形期の舌は実用的な機能を持つと推定されている。崖墓には、実際の木造建築では構造的に使用できない湾曲が見られる石刻斗拱が存在するが、確かにそのような事例に舌は付随しない。今回舌が最も多く見出された郷江地域でも、既報告の石刻斗拱二〇九個のうち二%の二五個にしか舌の表現は見られない(図2)。後の時代の舌は形

骸化し消滅していく細部意匠となるが、後漢においてもすでに斗拱を成立させる上で構造的に必須の部材と考えられていなかった可能性がある。崖墓中の石刻斗拱には双斗、皿斗、舌など、法隆寺建築様式の斗拱に見られる細部意匠が多く確認できる。その肘木上面は中央部から巻斗間において、凹面状に湾曲しているものが多い。これは実際の後漢建築の肘木をデフォルメしたものであると考えられるが、法隆寺西院伽藍の主要建築の肘木上面も凹面状に処理されているものが多く、関連性が伺われる。ここには後漢の斗拱の名残が反映されていると考えられる。

三、二重双斗式と二重三斗式の斗拱
法隆寺建築様式における壁付斗拱は、双斗の斗拱のそれぞれの巻斗上に、双斗の斗拱が設置される二重双斗式斗拱が形骸化したものであると

二重三斗式の斗拱
法隆寺建築様式における壁付斗拱は、双斗の斗拱のそれぞれの巻斗上に、双斗の斗拱が設置される二重双斗式斗拱が形骸化したものであると

指摘されている(飯田一九五三)。関口欣也もこの点には注目しており、その類例が後漢から東晋にかけて見られるとしている(関口一九七六)。関口の指摘以降報告された類例としては、西晋の甘肅省仏爺廟湾画像傳墓群(二九〇年前後)(戴編一九九八)の例や、双斗上に三斗が設置される特異な二重式斗拱が磚によって表現される山西省臨猗漢墓(李・范二〇一六)などがあるが、やはり二重双斗式斗拱は後漢から西晋晚期にかけての墓や絵画に表現されているようである(図3)。

なおその後、双斗の使用が一般的でなくなるに従って、二重双斗式斗拱は絵画や彫刻に見られなくなるが、代わりに山西省大同文瀾路北魏壁画墓(五世紀)(大同市考古研究所二〇一一b)、陝西省史君墓石棺(五八〇年)(西安市文物保護考古所二〇〇四)や高句麗の五世紀代の壁画墓などに見られる、二重三斗式斗拱が現れる。

興味深いことに奈良県の山田寺跡(七世紀中葉)からは二重三斗式斗拱に用いられたと考えられる肘木が発見されている(山岸・島田編一九九五)。山田寺跡で発見された斗拱は三斗で、舌はあるものの、皿斗がないなど、ここでは法隆寺建築様式とは異なった建築様式が採用されていることがわかっているが、斗拱の型式から見ると、山田寺の方が後出する建築様式を一部採用していると言える。韓国忠清南道にある浮石寺無量寿殿など、後代の建築物にもこの二重三斗式斗拱が用いられている

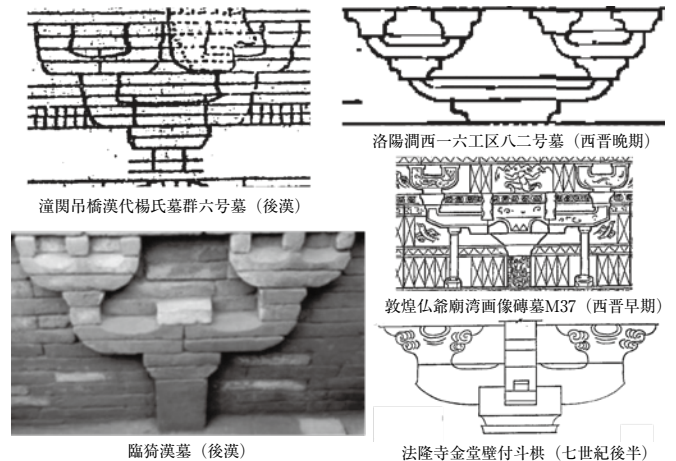


図3 二重双斗式斗拱の類例(縮尺不同)

例があることを勘案すると、七世紀中葉の中国及び朝鮮半島では、二重三斗式斗拱が実際に用いられていた可能性が高い。山田寺で同時代の東アジアの建築様式が取り入れられていたとすると、法隆寺に二重双斗式斗拱から派生した形の斗拱が見られることは、特殊な現象と考えられる。例えば法隆寺再建時に、創建時の建築をモデルにするなど、あえて古い建築様式が導入されたことも想定されるだろう。

四、中国南北朝の斗拱型式

ここまで確認してきたように、法隆寺には双斗から派生したごく古い建築様式が一部採用されている。実際の木造建築・壁画・明器が多く残っているため、唐代の建築様式は比較的明らかになっているが、そこには双斗が全く用いられないなど、現在の法隆寺西院伽藍の主要建築に比する建築様式を持った資料は見つかっていない。このことから、法隆寺西院伽藍では、再建の際あえて最新の唐代の建築様式を採用していないと考える説もある（宮本一九九〇）。

法隆寺に、後漢代に端を発する建築様式が導入されていることは、これまで指摘されてきていたが、後漢代から法隆寺建立までの時間的ヒ

アタスを埋めるような資料は、あまり見いだされて来なかった。しかし、近年山西省において、法隆寺建築様式を考える上で重要な墓が多数見つかっている。そのうちの 하나가、大同市の尉遲定州墓（大同市考古研究

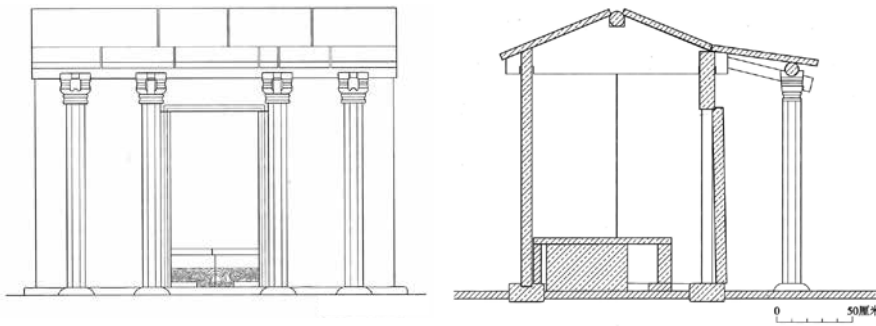


図4 尉遲定州墓石棺実測図 (S=1/50)

所二〇一一a)である(図4)。この墓は五世紀中葉、北魏の地下式磚室墓だが、内部にある家形石棺の側柱に皿斗のある双斗式斗拱が用いられている。この斗拱の肘木中心部には虹梁の先端が架けられているが、これは後漢代の石刻斗拱の肘木中心部に表された長方形の部材と同様のものであると考えられる。

坍塌し高欄や人字形の割束（なお叔首は甘肅省地壘坡一号晋墓（甘肅省文物考古研究所・高台县博物館二〇〇八）の例から西晋には既に存在する）などの最古例が北魏の墓や石窟から見つかっていることを勘案すると、後漢に盛行する双斗が北魏になってもなお、残存し使用されている点是非常に重要である。これらの建築様式から派生したものが、法隆寺建築様式につながるものである可能性は十分にある。

さらに同じく山西省の忻州市では九原崗壁画墓（山西省考古研究所・忻州市文物管理处二〇一五）において、東魏から北齊初頭に描かれたと推定される門楼図が発見されている(図5)。ここに描かれた建物について注目すべき点



図5 九原崗壁画墓門楼図

は、法隆寺に所蔵される玉虫厨子や、その類例として知られる河南省博物館所蔵の灰陶加彩房と同様に、秤肘木を持たず、手先方向に伸びる肘木と斗だけで構成されるシンプルな組物が軒を支えていることである。さらに、この組物は壁付方向の通肘木と直交せず、若干斜めに開く形に描かれている。玉虫厨子は、入側柱と側柱の柱筋が壁付方向と直交しない岐阜県正家庵寺金堂のような建物を模して作られた可能性があるが、この門楼図に描かれた建物もこれと同様の構造を持っているものとして描かれた可能性が高い。この点も玉虫厨子と共通しており興味深い。

玉虫厨子の軒を支える組物は肘木と斗からなる三手先斗拱を一体化したものであり、このような組物が法隆寺の雲肘木に型式変化すると考えられているが（上原一九六七）、その遡源的な手先方向の組物は中国南北朝の建築に求められる可能性があるだろう。

五、まとめ

従来の指摘では、法隆寺建築様式は後漢以降の様々な様式が混在したものとされてきた。しかし、後漢の崖墓に見られる双斗と類似した双斗や、玉虫厨子と類似した手先方向の斗拱を描いた門楼図が発見されたことにより、その建築様式に関わる要素の多くが、中国南北朝に共存していたことが明らかになった。中国南北朝に存在した建築様式がベースとなり、直接の法隆寺建築様式の原型が形成された可能性を指摘したい。しかし、二重双斗式斗拱のように、極めて古い時代にしか類例がない建築の細部様式はまだ存在する。今後とも、資料の集積をすすめて、その時間的ヒアタスを埋めていく作業が必要である。

筆者は、古建築を専門に学んできたわけではなく、その構造的な理解、研究史の理解等に至らない点が多々

あると思う。しかし、かつて濱田耕作が行ったように（濱田一九二六）、考古学の視点にもとづく資料の提示を、学問分野を超えて行っていくことは肝要である。今回提示した資料が、古代建築史の研究を前進させる一助になれば幸いである。

本稿を執筆するにあたっては、奈良地域振興部文化財保存事務所の方々に大変お世話になりました。末筆ながらお礼申し上げます。

参考文献

（日本語）

- ①飯田須賀斯一九五三『中国建築の日本建築に及ぼせる影響』相模書房
- ②上原和一九六七「法隆寺金堂の雲形斗拱について―法隆寺様式におけるバロツク的なもの―」『美学』第七〇号 美学会
- ③関口欣也一九七六「朝鮮三国時代建築と法隆寺金堂の様式的系統」『日本建築の特質 太田博太郎博士還暦記念論文集』中央公論美術出版
- ④竹島卓一編一九六二『国宝法隆寺金堂修理報告』法隆寺国宝保存工事報告書第十四冊
- ⑤田中淡一九八四「大陸系建築様式の出現」『全集日本の古寺』第十卷 集英社
- ⑥唐聡二〇一七「法隆寺金堂の「舌」と『营造法式』の「鸞尾」の関連性について―東アジアにおける舌とその源流の系統的再考―」『建築史学』第六十八号 建築史学会
- ⑦濱田耕作一九二六「法隆寺の建築様式と支那漢六朝の建築様式について」『東洋美術史研究』所収（一九四二）
- ⑧宮本長二郎一九九〇「飛鳥時代の建築と仏教伽藍」『法隆寺から薬師寺へ』日本美術全集第二巻 講談社
- ⑨山岸常人・島田敏男編一九九五『山田寺出土建築部材集成』奈良文化財研究所
- ⑩李雨鍾（訳・鈴木一議）二〇一四「百濟寺院の上部構造築造方法研究の推移」『百濟寺利研究（日本語版）』奈良県立権原考古学研究所

- ①戴春陽編一九九八『敦煌仏爺廟湾西晋画像磚墓』甘肅省文物考古研究所
- ②大同市考古研究所二〇一〇 a 『山西大同陽高北魏尉遲定州墓發掘簡報』『文物』二〇一一年第十二期
- ③大同市考古研究所二〇一〇 b 『山西大同文瀛路北魏壁畫墓發掘簡報』『文物』二〇一一年第十二期
- ④甘肅省文物考古研究所・高台県博物館二〇〇八「甘肅高台地壇坡晋墓發掘簡報」『文物』第九期
- ⑤河南文化局文物工作隊第二一六工区發掘小組一九五六「洛陽渭西一六工区八二號墓清理記略」『文物參攷資料』一九五六年三期
- ⑥李寧波・范文選二〇一六「運城臨猗漢墓出土磚砌做木結構斗拱在全国極為罕見」『山西日報』六月七日 山西日報社
- ⑦綿陽博物館・成都文物考古研究所編二〇一五『綿陽崖墓』文物出版社
- ⑧山西省考古研究所・忻州市文物管理所二〇一五『山西忻州市九原崗北朝壁畫墓』『文物』二〇一五年第七期
- ⑨陝西省文物管理委員會一九六一「潼關吊橋漢代楊氏墓群發掘簡記」『文物』一九六一年第二期
- ⑩四川省考古研究院・德陽市文物考古研究所・中江県文物保護管理所編二〇〇八『中江塔梁子崖墓』文物出版社
- ⑪四川省考古研究院・綿陽市博物館・三台県文物管理所編二〇〇七『三台郡江崖墓』文物出版社
- ⑫四川文物考古研究院・綿陽市文物管理局・涪城文物管理所二〇一五『四川綿陽市涪城区桐子梁東漢崖墓發掘簡報』『四川文物』二〇一五年第四期
- ⑬西安市文物保護考古所二〇〇四『西安市北周史君石槨墓』『考古』七
- ⑭張霁二〇一六『東漢巴蜀崖墓建築研究』重慶大學建築城規學院

- 挿図出典
- 表1..筆者作成。図1..中国語文献⑪、筆者撮影。図2..筆者作成。図3..日本語文献⑤、中国語文献①・⑤・⑥・⑨。
- 図4..中国語文献②。図5..中国語文献⑧。

中国陝西省における研修(上)

北井利幸

一、はじめに

本研修は、奈良県国際課の「奈良県戦略的専門分野交流事業」により、橿原考古学研究所の所員を中国陝西省に派遣して実施するもので、平成二六年度から開始されました。研修期間は平成三〇(二〇一八)年一月一日から平成三一(二〇一九)年三月十五日までの一三五日間で、陝西省の受入先は西北大学文化遺産学院及び陝西省考古研究院です。期間中は西安市を中心に山西省、河南省、四川省、甘肅省、寧夏回族自治区でも研修を行いました。

二、出国まで

研修の話聞いたのは五月の大型連休の中日、五月二日でした。当時四歳の子どものことを思うと長期間の海外出張に行くことに不安を感じましたが、またとない機会と思い承諾しました。その日の夜、家で小言を言われたものなのか説得し、子どもにも少し長い出張だと伝え、納得してもらいました。

中国への出発は、前年度同様に一月中旬予定でしたが、手続きを進

める過程で一二月一日に決まりました。出発までに現地での調査を滞りなく進めるために、必要な道具を準備しました。中国の博物館では展示品を撮影できることから、短時間で効率よく見学し、確実に記録を残すことを目的に暗所に強い高精度デジタル一眼レフカメラとマイクロレンズを中心に広角・望遠レンズを用意しました。このほか三脚、顕微鏡撮影可能なデジタルカメラ、メモ用カメラなども揃えました。また、前任の米川裕治所員より中国での生活の様々な場面で必要になると言われた

「微信」(WeChat)「百度地図」「中国鉄路」をインストールし、スマートフォンを徐々に中国仕様へと変えていきました。

中国語は、学生時代に講義を受けて以来のためほとんど覚えていませんでした。そこで派遣されるまでの間に龍谷大学国際学部の留学生で西安市出身の楊方吳氏に八月末から週に一回中国語の講義を依頼しました。楊氏からは現代の中国人の生活習慣、西安市内の様子なども聞くことがで

き、出国前に中国の様子を知ることができました。

三、出発

関西国際空港に午前七時に到着しましたが、中国東方航空の機材トラブルにより搭乗開始が一時間遅れ、一時三〇分過ぎに離陸しました。西安咸陽国際空港への到着も遅れることとなりましたが、空港に迎える

来てくれた西北大学文化遺産学院の孫麗娟先生に「微信」で連絡をしていたため問題なく合流することができました。西北大学の車両で空港から生活拠点となる西北大学賓館へと移動しました。到着が遅れたため夕方の渋滞に巻き込まれ、一時間程度で移動できるところを一時間三〇分ばかり、賓館には現地時間一九時一五分に到着。孫先生のご協力により賓館へのチェックイン、現地で使用する携帯電話のSIMカードの購入をスムーズに行うことができました。

これにより電話・インターネット環境は初日に全て整い、国際課・博物館・研究所、家族へと連絡し、初日は寝床につきました。

メール、インターネットは、日本と異なり制約が多いと思っていました。日本が、日本の利用環境と大差ない状況で使用できました。ただし、検索

エンジンは限られ、閲覧できないホームページも多くありました。また、中国以外の検索エンジンの利用が突然禁止されたこともありました。数日でしたがこういう時に限って調べたいことがあり、日本のサイトを開けず苦慮しました。

四、西安での生活

西北大学 研修期間中の生活拠点は校内にある賓館です。私の部屋は六階で、エレベーター・階段の隣でした。留学生楼でもあり、様々な国の留学生が滞在していました。二〇一八年に校内で見かけた日本人は五名でした。西安市内や秦始皇帝陵博物院など有名観光地に出かけても、日本人に会うことは稀でしたが、翌年の新学期が始まると日本人を見かけることが少し増えました。電車やバスをかけることが非常に多く、声かけられることが非常に多く、たどたどしい中国語で日本人だと伝えるとよほど珍しかったのかいろいろと聞かれました。しかし、言葉の壁は高く会話が長く続くことはほとんどありませんでした。

大学校内には総合博物館である西北大学博物館があり、歴史以外に地学・植物学など、中国について学びました。大学博物館という性格のた

めか、大変落ち着いた環境で見学することができました。

大気汚染 西安の大気汚染については、出発前に国際課の事前説明で聞いていました。スマートフォンで天気予報には、現在の状況がリアルタイムに「深刻」「重度」「軽度」などと表示されました。「深刻」「重度」の表示が続くと気分が非常に重たくなりました。特に一月はひどく、二週間ほど深刻または重度な大気汚染が続きました。二月頃から天気予報に、大気汚染情報が表示されなくなりました。明らかに視界不良で「深刻」と思われる日も、「靄」とだけ表示されるにとどまりました。一食一〇元程度で食べられるなか、高機能マスクは一つ一五元と高価で、数日間使い続けると外面が黒く変色しました。黒色のマスクが流行しているのにはそれなりの理由があるのだろうと思います。

中国での生活に少し慣れてきたときに、部屋のレースの白いカーテンが白くないことに気がつきました。長年洗っていないか、開け閉めすると埃が舞っていました。一度気になると落ち着かないので、思い切って洗濯したところ、真っ白になり、部屋が明るくなりました。

食生活 辛い物とパクチーが苦手

なため、出国前から不安を抱えていました。多くの料理に唐辛子・花椒などの香辛料がふんだんに使用されていたほか、肉料理には八角を使っていた味付けがなされており、辛くはないけれど食べられない味も多くありました。食文化を堪能するためにも、初めて訪れる場所では名物料理・特産品、出された料理を食べることを心がけました。たとえどれだけ辛くても味わい、食べきる努力をしました。ただ、一人で食事をする際には、辛い料理を探したり、世界展開するファストフード店で食べたりしました。世界展開をしても味付けがかなり異なり、日本の味付けと比較ができ味わい深かったです。

西北大学には、学生向けの食堂が四店舗ありました。一店舗は清真料理で、ほかは様々な料理を食べられる食堂です。店員に確認して辛い料理を注文しても、現地基準のためほとんどの料理が私には辛かったです。いろいろな料理を食べた結果、最もおいしかったのは「西紅柿炒蛋」。白ご飯と西紅柿炒蛋だけを注文すると、不思議な顔で見られることが多いです。陝西省考古研究院にも食堂がありました。メニューは定

食か麺の二種類でしたが、一食五元と思えないほど量が多く、おいしかったです。そのため研究院にいる時は外食せずにほとんど食堂で食べていました。

研修期間後半ともなると、私が辛い料理を苦手であることが陝西省考古研究院の役員にも知れ渡り、食事会の時には辛い料理や唐辛子抜き料理を注文してもらうなど配慮頂きました。

水は生水を避け、購入した水を煮沸して飲みました。珈琲や紅茶ではなく、茶店でさまざまな茶葉を購入し、中国茶を堪能しました。

研修期間中、食事も水も問題なく体調を崩すことなく過ごすことができました。

交通手段 日々の移動は、主にバスを利用しました。一二月二六日に地下鉄四号線が開通して、市内の移動はさらに便利になりましたが、バスが便利すぎて高速鉄道の西安北駅に行く時以外、地下鉄を利用することとはほとんどありませんでした。市内では地下鉄工事があちこちで行われており、数年後には秦始皇帝陵近くまで開通することでした。市外への移動には、高速鉄道を利用しました。チケットは駅の窓口でも購

入できましたが、満席で購入できないと予定が変更となるため、陝西省

考古研究院の李建西氏にお願いし、インターネットで予約・購入頂きました。購入画面を微信で送ってもらい駅の窓口でパスポートと一緒に提示すると発券されました。高速鉄道は、日本人からすると大変安価で、速度も速いため非常に便利な移動手段でした。西安から山西省太原市まで約三時間、河南省洛陽市まで約二時間二〇分、四川省成都市まで約三時間一五分、甘肅省蘭州市まで約三時間。朝七時台の電車に乗れば日帰り可能でした。陝西省北部の榆林市や寧夏回族自治区へ行く時は飛行機を利用しました。航空会社によっては酸素マスクや非常口などの説明がなく、若干不安になりましたが、いざ使用することなく済んだので問題ありませんでした。

西安市内には、流行りのレンタサイクルがそこかしこに放置してありました。利用したかったのですが、支払い方法が電子決済のみであったため断念しました。自転車があれば行動範囲がさらに広がったと思われます。

語学研修 研修期間が一月からであったため、西北大学で中国語の

授業を受講できませんでした。そこで、文化遺産学院の冉万里先生に相談して、木村理恵所員がお世話になった先生に家庭教師を依頼しました。

この先生は、河南省の鄭州大学に勤務しているため、土日しか時間をとれませんでした。しかし、土日は私が出張に出ることが多く、定期的な受講できませんでした。そこで、テレビでニュースや字幕付きの番組を見て、少しでも中国語に慣れようと思いましたが、一二月下旬にテレビが故障しました。二月一日に修理が終わりましたが、電波の入りが悪く、電源を入れてしばらくすると画面が動かなくなるという状態が続き、テレビでの学習を諦めざるを得ませんでした。こんな状況でしたので、店員やタクシートの運転手に話しかけて勉強しようと試みましたが、言葉が通じないとわかると多くの中国人は、親切にも自分たちのスマートフォンスマートフォンの翻訳アプリを使ってコミュニケーションをとってくれました。翻訳アプリを利用することで、日常生活におけるコミュニケーションを容易にとることができたため、残念ながら語学研修には全くなりませんでした。

陝西省考古研究院 西樓三階三〇六号室の机を与えられました。週に

三〜四日出勤し、書庫で資料収集をしたり、展示室で資料を熟覧したりして過ごしました。春節前の二月二日には、研究院で開催された「陝西省考古研究院二〇一九新春団拜會暨二〇一九迎春職工趣味运动会」に参加しました。研究院の食堂で、職員家族も含めた食事が開かれ、新規採用職員や退職者、二〇一九年の干支の亥年生まれの職員の紹介などが行われました。抽選会もあり、大変賑やかな会でした。私は残念ながら抽選に外れましたが、終了後に孫周勇院長から、ご自身が当選した電気湯沸かし器を記念に頂きました。

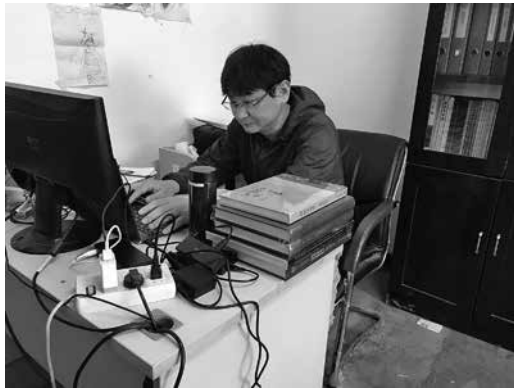


写真1 陝西省考古研究院での研修風景

しかし、日本の規格に対応していなかったため、お気持ちだけ頂くことにしました。午後からは院内で運動会が開催されました。ダーツ、ピンポン球運び、砂袋投げ、サッカーと四競技あり、参加者全員で点数を競いあいました。会議室の壁に無数の穴が開いていたことを不思議に思っていたところ、その原因がダーツによるものであることがわかり、衝撃を受けました。もちろん私もいくつか穴を残してしまいました。今後派遣される所員には、是非ダーツ、サッカーの練習を忘れないよう引き継ぐ予定です。(以下、160号に続く)

附属博物館関連展示

案内

附属博物館巡回特別展

『しきしまの 大和へ』

—アジア文華往来—

主催…附属博物館・横浜ユーラシア文化館・東京新聞

開催期間…令和二年四月二一日(火)〜七月五日(日)

開催場所…横浜ユーラシア文化館

*以降の巡回館

九州国立博物館(令和二年七月二八

日(火)〜二月二〇日(日))
鳥根県立古代出雲歴史博物館(令和三年三月一九日(金)〜五月一七日(月))

海外交流

派遣…昨年一〇月より三月一八日までの予定で中国陝西省(西北大学文化遺産学院・陝西省考古研究院)へ派遣していた鈴木一議所員及び、本年一月より三月二〇日までの予定で韓国国立文化財研究所へ派遣していた重見泰所員は、新型コロナウイルス感染症流行の影響でやむを得ず研修期間を短縮し、鈴木所員は二月四日に、重見所員は三月七日にそれぞれ帰国しました。

受入…中国寧夏文物考古研究所の郭家龍氏(専門…中国旧石器)は、昨年九月から一〇ヶ月間の予定で研修されています。帰国は本年七月一七日です。

昨年一〇月から研修されていた西北大学文化遺産学院の苗凌毅氏(専門…漢代金器)は、本年一月一日に帰国されました。

本年一月から研修されていた陝西省考古研究院の孫戰偉氏(専門…商周青銅器)は、二月二九日に帰国されました。